

【第５回】遠藤・御所見・長後、歴史や自然とのゆかり

藤沢地名の会 会長 佐々木道雄

第一部：遠藤地区

第１章．遠藤地区の特徴

- 民俗学の権威である柳田国男氏が市内在住の民俗学者丸山久子氏他が刊行した『遠藤民俗聞書』を聴取した後、「遠藤という村はよくよく歴史とは因縁のない、無名の地であったという感じを深くする」と感想を述べた。
- 明治２２年の市制・町村制施行時で小出村の所属となるが、明治２９年に小出村が藤沢市と茅ヶ崎市のいずれと合併するかで住民投票が実施され、茅ヶ崎市との合併に決定。その後、遠藤集落の住民から不満が出て、数か月後に遠藤集落のみが藤沢市に編入。
- 地内の琵琶島・笹久保・山崎・神明谷戸・打越・苅込・仲町・上庭（かさ）・諸之木・北原・松原・矢尻・南・久保といった集落ではそれぞれに「コミヤ」と呼ばれる小さなお宮を保有していた。明治３９年（１９０６）の神社合祀令で一町村一社への統合を命じられ、総鎮守である御嶽神社に統合されたが、依然として集落ごとに「コミヤ」への信仰は継続した。

第２章．遠藤地区の地名由来

- 『皇国地誌』に「往昔ヨリ本郡ニ属ス起源詳ナラズ口碑ニ治承年間(1177-1180)遠藤武者盛遠ノ采地ナリシヲ以ッテ村名トシ後ニ大庭庄遠藤村ト号ス---」とある。遠藤武者盛遠がこの地を支配したことに由来といわれる。
- 盛遠は平安末期から鎌倉初期の北面の武士。１７歳のとき人妻である袈裟御前に横恋慕し、誤って袈裟を殺す。自らを恥じた盛遠は１８歳で出家、文覚と名乗り、後白河法皇により伊豆に流され、頼朝に会い信頼を勝ち得るという劇的な人生を送る。



【写真５－１：文覚上人供養祠（個人宅内）】
（筆者撮影）

１．大字「遠藤」

遠藤地区は大字「遠藤」の単独の大字から構成

（１）大字「遠藤」の地名由来：第２章参照

（２）「遠藤」の小字の地名由来

- 【資料１２：遠藤地区の小字】のうち、「丸山」・「矢向（やむこう）」・「大平（おおだいら）」・「滝の沢」・「都築山」は近年、湘南大庭地区に移管。
- 大字「石川」のうち「近藤山」・「一色上」・「一色下」は行政管理上は「遠藤地区」。自治会組織は「石川」に所属。

① 地形・地質等の特色に因む小字名（自然地名）

琵琶島（びわじま）：楽器の琵琶に似た形の島が池の中央にあることから。神明谷戸とともに、茅ヶ崎市との境界をなされる小出川の水源になる。集落のコミヤに弁財天を祀っていることから「弁天島」とも呼ばれる。

秋葉原（あきはらは）・向原（むこうはら）・北原（きたはら）・中原（なかはら）・南原（みなみはら）・松原（まつばら）・東原（ひがしはら）：地区の中央部の台地にある。宝泉寺裏から秋葉原に至る一帯は秋葉台と呼ばれ、地名はこの神社に有った秋葉神社に因む。小中学校や体育館はこの秋葉台に因む。

窪前田（くぼまえだ）・久保（くぼ）：「原」と同じ低い地形という意味という説と、昔、このあたりには小田原北条氏に仕えていた窪島氏が住み、その姓が地名となったとの説がある。

山崎（やまさき）：谷戸に挟まれた北から張り出した台地の北端部で山の先の意味。

打越（うちこし）：「おっこし」ともいわれる。丘陵を越える所に付けられた。上庭（かさ）集落の五霊坂（ごりょうざか）を登り、急坂を下って後谷戸（うしろやと）へ出て再び坂を上り下がったところが打越で、五霊坂から先は慶應大学敷地の造成で消滅。

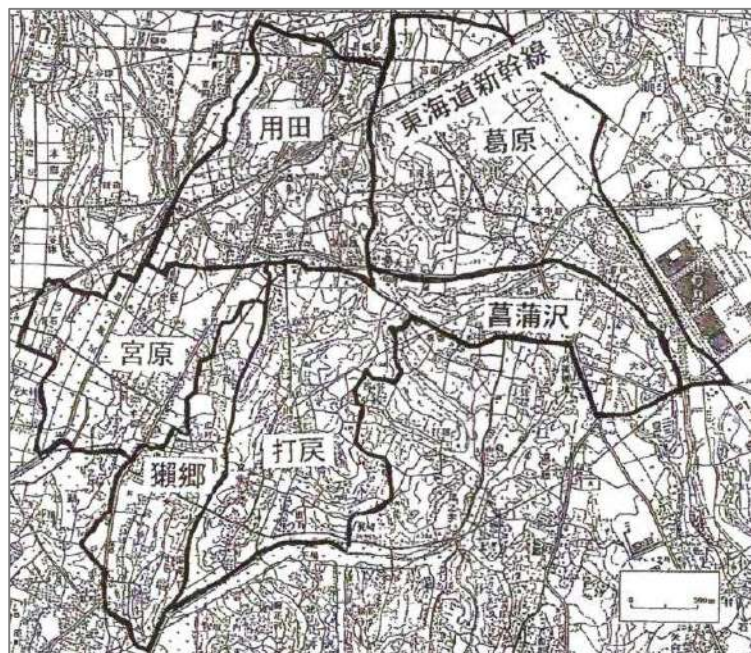
② 動植物など生物に因む小字名

笹窪上（ささくぼうえ）：熊笹が群生していた地域、かつては12軒の笹久保集落があったが、関東大震災で地割れが発生し、庭から水が噴き出して全戸が倒壊し、住民は高台に移転。今は墓だけが残る。

第二部：御所見地区

第1章．御所見地区の特徴

- 御所見地区は「用田」・「葛原」・「菖蒲沢」・「打戻」・「獺郷」・「宮原」の六つの大字から構成。
- 藤沢市北西部に位置し、綾瀬市、海老名市、寒川町、茅ヶ崎市と接する。
- 地層の基盤は相模野台地の上に関東ローム層が覆い、一部は小出川や支流の目久尻川、引地川支流の和泉川が沖積層になっている。この地域は泥田地帯でしたが、昭和初期からの耕地整理で良田に改良。



【図5-1：御所見村に合併される前の六カ村】

転載：平成25年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『地名が語る藤沢の成り立ち』

- 未だに山林や畑が多く残り、昔ながらの姿をとどめる。古代は東海道別路と東山道連絡道が通る交通の要衝で、今も長い歴史の伝承を持つ神社が各地に存在。

第2章. 御所見地区の地名由来

地名は菖蒲沢字大上（おおがみ）にあった「御所見塚」に由来。その昔、葛原の塩井淵に当時この地を知行していた葛原親王（かづらはらしんのう）の子孫とされる平忠望（ただもち）垂木主膳の住む「垂木の御所」があり、数キロ離れた塚から御所が見渡せたためといわれる。昭和30年代後半に一帯が開発されたことによりその塚は失われ、敷地内に「法皆萬霊神 大正二年五月」の碑だけが残る。



【写真5-2：御所見塚】

転載：『歴史をひもとく藤沢の資料Ⅰ 御所見地区』
(2016年)

1. 大字「用田」

(1) 大字「用田」の地名由来

相模国の一の宮である寒川神社の御神田があったことから用田と呼ばれると伝わる。詳しくは不明。秀吉の禁制にも「やう田の郷」と示されている。

(2) 「用田」の小字の地名由来

① 地形・地質等の特色に因む小字名（自然地名）

女坂（めざか）・男坂（おとーざか）：旧中原街道にある二つの坂の内、急な坂を男坂、緩やかな坂が女坂と呼ばれる。

② 民俗・信仰に因む小字名

薬師峰（やくしみね）：用田の豪族、名主伊東孫右衛門がこの小高い丘に薬師堂を建てたことに因む。

御手洗水（みたらし）：神社の入口で参拝者が手や口を清めるため、手水を使うところを「御手洗」という。ここには寒川神社があり、同社の御手洗から地名が付けられたと思われる。

中条（ちゅうじょう）：奈良時代に継母に捨てられた後、大和の当麻寺（たいまでら）で出家し、尼となり蓮系で曼荼羅を織ったといわれる中将姫を祀ったといわれる祠があることに因む。毎年3月に中条の人が集まってお祭りを行う。



【写真5-3：中将姫の祠】（筆者撮影）

2. 大字「葛原」

(1) 大字「葛原」の地名由来

葛原親王（かづらはらしんのう）に因む地名といわれるが、詳しくは不明。他に葛が生い茂っていたからの説もある。秀吉の禁制にも「葛原之郷」と示されている。

（2）「葛原」の小字の地名由来

① 地形・地質等の特色に因む小字名（自然地名）

滝谷（たきやと）・下滝谷戸（しもたきやと）：葛原にある滝不動に因む。

② 民俗・信仰に因む小字名

観音道（かんのんみち）：葛原から綾瀬市の報恩寺（別名おたすけ寺）への道。

③ 人間の営みに因む小字名

若狭（わかさ）・若狭野（わかさの）：この地を開拓した矢部若狭朝隆の幼名若狭を取ったものと思われる。現在も子孫が当地に住んでいる。

塩井淵（しおいぶち）：ここに塩汲井という古跡があり、井戸で塩をとったといわれる。この話が地名の由来となったと思われるが、定かではない。

3. 大字「菖蒲沢」

（1）大字「菖蒲沢」の地名由来

『皇国地誌』によれば、「往昔ヨリ本郡高座郷ニ属ス蓋東北部ナル沢辺ニ水草菖蒲等生セル地ヨリ開拓セシヲ以テ菖蒲沢ト村名セシナルベシ」と記されている。生業は農業が中心で、農閑期には養蚕を行っていた。

（2）「菖蒲沢」の小字の地名由来

① 民俗・信仰に因む小字名

宮の前（みやのまえ）：菖蒲沢の鎮守である豊受神社のあるところ。

4. 大字「打戻」

（1）大字「打戻」の地名由来

地内に式内社宇都母知（うつもち）神社があり、かつては宇都母知村と称していた。のちに転訛して「打戻」になったという説。別の説として、昔、海老名の刀鍛冶が自分で打った刀を鎌倉に持参する途中で、当地で休息した際に、改めて刀を見て仕上がりに満足せず、家に持ち帰って打ち直したので、「打戻」となったとの説がある。この地名は戦国時代から見え、秀吉の禁制にも「多加久羅郡しばや庄うちもとりの郷」とある。

（2）「打戻」の小字の地名由来

① 地形・地質等の特色に因む小字名（自然地名）

宮台（みやだい）：宇都母知神社のある小高い台地の意味と思われる。民俗・信仰に因む小字名との複合した小字名といえる。

② 人間の営みに因む小字名

古里（ふるさと）：かつて古里神社があったことに因む。のちに、宇都母知神社に合祀された。

5. 大字「瀬郷」

（1）大字「瀬郷」の地名由来

『皇国地誌』によれば、昔、「往古ヨリ本郡寒川郷ニ属ス在昔各所ニ沼池アリテ瀬ノスメル居多矣」とあり、各所に沼地があって瀬（かわうそ）が住むところが多かったため

といわれる。村社の裏口の字雷（いかづち）という所に池があり、常時湧き水があったとのこと。

（２）「瀬郷」の小字の地名由来

① 地形・地質等の特色に因む小字名（自然地名）

中谷（なかやと）：地内中央に南北に続く谷戸があり、これに因む小字名。

② 民俗・信仰に因む小字名

雷（いかづち）：昔、子聖神社（ねひじりじんじゃ）の北に雷が落ち、「雷さま」という祠をつくった。これに因み、このあたりを雷（いかづち）と呼ぶようになったと伝わる。



【写真５－４：子聖神社】 （筆者撮影）

６．大字「宮原」

（１）大字「宮原」の地名由来

『皇国地誌』によれば、「往古ヨリ本郡寒川郷ニ属シ本国一ノ宮寒川神社ニ近キ原野ヲ開拓シテ一村ヲナセシヨリ宮原村ト号ス」とあり、この地名も戦国時代から見える。

（２）「宮原」の小字の地名由来

① 人間の営みに因む小字名

百石原（ひゃっこくばら）：江戸時代、寒川神社の社領地百石を与えられたからという説、作物が沢山とれたからという説、地頭へ作物百石を納めたからという説がある。

高田（たかだ）：やや高いところにある田で、水はけがよく収穫量も多かったところ。

矢田（やだ）：目久尻川沿いの田で、泥田が多くて作柄が悪く、胸まで浸かるくらいの湿田なので、ただで貰ってもやだというので、この名がついたといわれる。

第三部：長後地区

第１章．長後地区の特徴

- 「長後地区」は中世の渋谷荘に属する地域で、長後天満宮は１２世紀半ばに当地域に入部した渋谷重国の館跡との伝承があり、渋谷荘の中心地。
- 近世には長後村・七つ木村・千束村・下土棚村が所在し、旗本が領主。場合によっては複数の領主が一つの村を知行することもあった。『皇国地誌』によると、長後村は天正１９年（１５９１）に上長後村と下長後村に分かれていた。このころ、上長後村は幕府直轄地に、下長後村は旗本朝岡氏の知行地となっていた。明治元年（１８６８）に上長後村・下長後村は一村になった。

第2章. 長後地区の地名由来

- 天文11年(1542)9月26日の小田原北条氏三代氏康書状に「渋谷庄内福田郷、千束・七次・長期」とある。
- 地名の由来について『皇国地誌』には「往古ヨリ本郡高座郷ニ属ス蓋シ高座郡ノ長ナルヨリ長郷村ナルヲイツシカ長後ト書シナルベシロ碑ニハ鎌倉府ノ頃領主渋谷庄司重国入道長後坊本村ニ住セシヨリ長後村ト名クトモイヘリ」とある。
- 弘安5年(1282)年3月1日一遍上人が巨福呂坂から鎌倉入りを図る3日前に滞在していたといわれる「なかさこ」とは長後のこととの説があるが、異説も発表されている。

1. 大字「高倉」

(1) 大字「高倉」の地名由来

明治8年(1875)に高座郡七つ木村と千束村が合併して高倉村になった。かつて高座郡は「たかくら」と読まれていたこともあり、高座を高倉にして合併村名にした。明治22年(1889)には渋谷村の大字だったが、昭和30年に藤沢市の大字になった。

(2) 「高倉」の小字の地名由来

① 地形・地質等の特色に因む小字名(自然地名)

滝ノ上(たきのうえ)：地区の最北端で境川と国道467号線に挟まれた辺りに崖があり、水が滝のように落ちていたことからこの一帯を滝ノ上と呼んだ。

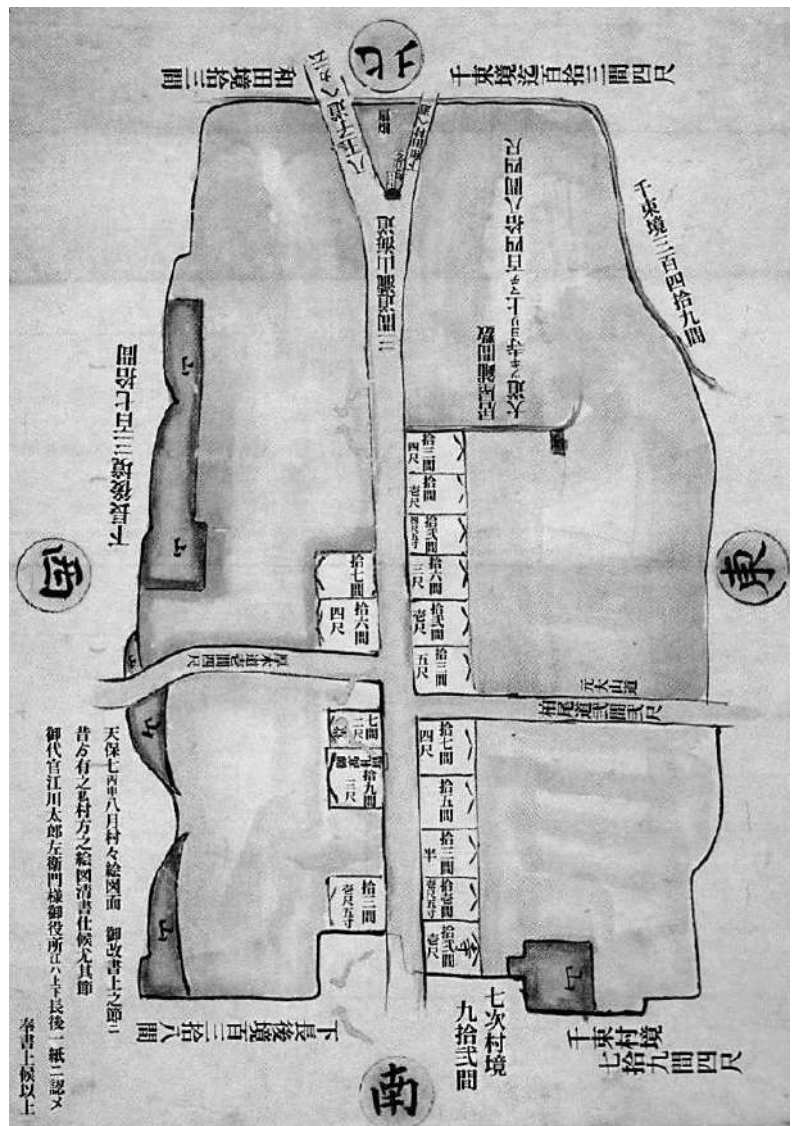
枯藪(かれやぶ)：雑木、萱(かや)、竹林の藪が多くあったことから名付けられた。

これらの藪は燃料や肥料を得るために村人には必需品だった。

大塚戸(おおつかど)・上谷戸(かみやと)：大塚戸は別名下谷戸といい、東隣の小栗(こくり)にかけて谷戸があった。ここは現在、大部分は湘南台地区に編入されている。上谷戸は下谷戸に対する名。

② 動植物など生物に因む小字名

槐戸(さいかちど)：この辺りに槐の大木が7本あったことから旧村名である七つ木村に、この木を切ったらたきぎが千束できたので千束村になった。ここ



滝山街道沿いに屋敷が並び、宿場町のような景観であった。通りに面した間口が記されており、宿場町と同じく、間口を基礎に何らかの賦課があったと思われる。

【図5-2：上長後村絵図(1836年)】

転載：『歴史をひもとく藤沢の資料 6 長後地区』(2022年)

は現在、大部分は湘南台地区に編入されている。

小栗（こくり）：山栗の混じった雑木林があったことに因む。小栗には底なし沼のような水はけが悪い田があったといわれる。ここは現在、大部分は湘南台地区に編入されている。

② 民俗・信仰に因む小字名

諏訪の上（すわのうえ）・諏訪の下（すわのした）：諏訪神社との位置関係から命名されたと思われる。



【写真５－５：旧七つ木村七つ木神社両部鳥居】

（筆者撮影）

２．大字「長後」

（１）大字「長後」の地名由来
地区名「長後」を参照。

（２）「長後」の小字の地名由来

① 民俗・信仰に因む小字名

天神添（てんじんぞえ）：平安後期から鎌倉時代にかけて、この地方を支配していた渋谷庄司重国の祖父基家が秩父から当地に移り住んだとき、城内に天満宮を勧請したことに因む。

山王添（さんのうぞえ）：付近の山王神社に因む名。

② 人間の営みに因む小字名

宿上分（しゅくかみぶん）・宿中分（しゅくなかぶん）・宿下分（しゅくしもぶん）：江戸時代、滝山街道・大山道が長後地域を東西に交差する辺りは藪鼻宿として賑わっていた。この３つの小字名は宿場に由来して残ったもの。

３．大字「下土棚」

（１）大字「下土棚」の地名由来

江戸時代の下土棚村が明治２２年（１８８９）の市町村制実施で、近隣五か村と合併して六会村、昭和１７年に藤沢市に合併。「長後地区」は昭和４６年六会村北部の下土棚と大字土棚２か村の移管を受け、平成元年の湘南台公民館開設後、大字「土棚」は湘南台地区に移管。

「下土棚」の地名は引地川が関東ローム層を永年に亘り浸食した結果、赤土の断崖が土の棚のようになったことに因むとみられる。

（２）「下土棚」の小字の地名由来

① 地形・地質等の特色に因む小字名（自然地名）

渋谷が原（しぶやがはら）：渋谷荘を支配していた渋谷氏に因む台地で田や畑が多くあった。ここは現在、大部分は湘南台地区に編入されている。

② 民俗・信仰に因む小字名

諏訪の棚（すわのたな）：棚とは引地川の段丘のこと。この辺りの住人は山梨から移住した小菅氏で、この一族が氏神として信仰していた諏訪明神を祀った

ことに困む。

③ 人間の営みに困む小字名

夏刈 (なつかり) : 昭和 36 年に周辺にいすゞ自動車藤沢工場が建設された。夏刈は夏に草刈をする共有地だったからとか、麦畑で夏に刈り取ったから付けられたとか言われる。

渋谷の里 (しぶやのさと) : 渋谷荘を支配していた渋谷氏に困む地域で、引地川流域の田園地帯。

新屋敷 (しんやしき) : 北端は長後の藪鼻宿に接していたが、この辺りは殆ど原野だった。のちに街道沿いに新しい屋敷がだんだんと建てられたことに困む。

<引用参考文献>

- 『藤沢の地名』 日本地名研究所編 平成 9 年(第 3 版) 藤沢市
『市民が歩んだ 80 年－「藤沢らしさ」を求めて－(続)藤沢市史別編 4』 2021 年 2 月 藤沢市
『歴史をひもとく藤沢の資料 1. 御所見地区』 2016 年 3 月 藤沢市文書館
『歴史をひもとく藤沢の資料 6. 長後地区』 2022 年 3 月 藤沢市文書館
『遠藤民俗聞書』 昭和 36 年 3 月 藤沢市教育委員会
『藤沢市史資料集(十一) 村明細帳・皇国地誌村誌』 昭和 61 年 11 月 藤沢市文書館
平成 14 年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『藤沢の地名～自然地名の由来をさぐる』 小林政夫 著
平成 16 年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『歴史を刻む地名～藤沢の歴史地名をめぐって』 湯山学 著
平成 25 年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『地名が語る藤沢の成り立ち』 仲摩邦夫 著
平成 29 年度『地名探訪配布資料 遠藤地区』 藤沢地名の会
平成 30 年度『地名探訪配布資料 御所見地区』 藤沢地名の会
令和 3 年度『地名探訪配布資料 長後地区』 藤沢地名の会
『藤沢市地名調査報告書(Ⅱ)、(Ⅲ)』 日本地名研究所 著 1985 年 藤沢市